「童学暑中休暇日誌」（芦田恵之助著）について

野地潤家

一

芦田恵之助著「童学暑中休暇日誌」は、明治四一年（一九〇八）六月三〇日、東京市の目黒書店から刊行された。当時、芦田恵之助は東京高等師範学校訓導であった。

本書の執筆動機については、芦田みずから、「はしがき」に、つぎのように述べている。

「私がこの学童暑中休暇日誌をなぜ書いたかといふことを一言いたしませう。

伊太利にド、アミチースといふ文学者があって、学童の生活を日誌体に書いて、それが盛に彼の国に行はれてゐるさうです。我国（ママ）にも既に杉谷代水氏によりて翻訳されてをりますが、私はこれを見て、『国は東西とかはっても、人情には大なる相違のないものが、我国学童の読み物としても、実に適当なものである。』とおもひました。

しかし、私は我国の文学者によりて、我国学童の生活がかの学童日誌のよーに書かれねばならぬものと常におもってゐますが、機が熟せぬのか、或は必要がせまらぬためか、今に至るまで、この種の著書は我が読書界に供給せられませぬ。

つら〳〵考へますのに、その理由がまたないでもありませぬ。この種の著作はかの普通に小説家と称する文学者には、少々望み難いところがあらうとおもひます。即ち、児童の趣味を十分に解することの出来ぬ者は、到底企てることは出来ますまい。そこで、最も児童をよく解する教育家に望まうとすると、これにはまたその材料を美化し、巧にこれを発表する術に欠けてをります。即ち教育者で文学者をかねてゐる人でなければ、手をつけることの出来ぬものとおもひます。

私はこの数年来、その道の人にあふ機会のあるたびに、学童日誌の著作をすゝめましたが、今日までまだ一冊も出ませぬ。そこで私は考へました。何事でも徒に他人にのみ待つのは甚だ悪なことであると。またたとひ世の嗤笑（し）を招くとしても、自ら著作してさらに名著のこの後に出ることをまつが捷径であると。

かよーに思ひ定めては、今は何事もかへりみるいとまがありませ

ぬ。そこで眼前にせまる暑中休暇を主題として、一面には学童がこの休暇を利用するよーにといふ目的をもって、一面には休暇中に於ける学童の感情を純正ならしむるといふ目的をもって、つひにこの日誌を書きました。私はこの著が今の世の要求を満足せしむるほどの立派なものだとはおもひませぬが、しかし、我国に今までに例のないものであることは、ひそかに誇とするところであります。

むかし千里の馬を求めるがために、まづ死馬の骨を五百金に買ったといふ話があります。もしこの書がその死馬の骨となりましたら、本書は斯道に大なる貢献をしたものと、私はうれしくおもひます。」

（同上書、「はしがき」一～四ペ）

この「はしがき」は、明治四一年（一九〇八）六月一〇日、夏休暇を眼前にひかえてしたためられ、その末尾には、「小蘆しるす」とあった。小蘆は、芦田恵之助のペンネームであった。

右の「はしがき」によれば、芦田恵之助は、イタリヤのアミーチスの「クオレ」に触発され、その学童日誌を高く評価し、みずからわが国の子どもたちのために、暑中休暇を主題として、「一面には学童がこの休暇を利用するよーにといふ目的をもって、一面には休暇中に於ける学童の感情を純正ならしむるといふ目的をもって」（同上書「はしがき」、三～四ペ）、この「学童暑中休暇日誌」を著わしたことがわかる。

二

さて、アミーチスの「クオレ」については、たとえば、世界家庭文学大系第一巻「クオレ」（一名、愛の学校）（アミーチス作、前田晁訳、平凡社刊）によれば、訳述者前田晁が、その「序」において、左のように説いている。

「『クオレ』（"Cuore"）はイタリヤ語で『愛』の義である。フランス語ならば"Coeur."（クール）に、英語ならば"Heart."（ハート）に当るのだが、泰西諸国の方の訳本のごときも、二三の例外を除くの外は、大抵は原語の"Cuore."をそのまま題目としてゐるほどにこの書は世界的なものとなつてゐる。或る英訳書には『イタリヤの学童の日誌』"An Italian Schoolboy's Journal."といふ又の名が註釈風についてゐる。これがその内容をほぼ示してゐるやうに、この書は十二歳になるエンリコといふ一学童の一学年間にわたつた日記体になつてゐる。けれども、事実はこのエンリコといふ一人の少年を通して、すべてのイタリヤの少年を最も完全な、最も申分のない、最も立派な人間につくり上げようといふのが著者の衷心の愛情から出た抱負であつたらうと思はれる。或るフランスの訳本に『愛の学校』（"L'école de Coeur."）といふのがあるが、字義の上から言ふと、これが最もよくその内容に合つてゐる。

原著者はエドモンド・ド・アミーチス（Edmondo de Amicis, 1846-1908）といふイタリヤの文学者で、二十一歳の時から文筆に従事し、著書はこの外にも数十冊ある。『クオレ』は四十五六歳のころ、すでに人生の全円を味識しつくした後に書かれたものであるだけに、子弟の教育に対し、学校と家庭との関係に対し、労働者対紳士階級の関係に対し、国民精神、愛国心、乃至あらゆる人生の諸相に対して、愛を基礎とした極めて行きとゞいた理解が遍満してゐる。その出版がイタリヤで空前の歓迎を受けたのに何の不思議があらう！一九〇四年五月、出版後十二三年にしてすでに三百版を重ね、わたし（引用者注、訳者前田晁氏）が初めて英訳書から翻訳

にか、つた大正八年の秋に参考のために手に入れたイタリヤの原作は実に六百八十八版であった。今は多分八九百版を越えてゐるであらう。しかも、この書が愛読され、歓迎されてゐるのは啻にイタリヤだけではない。文明諸国にはほとんどことゞく翻訳されて、少年少女の読物としてほとんど経典的権威を持つてゐる。その後、活動写真が世に行はれるやうになつてからは、この書中の幾場景かは更にまた競つて各国に映写されて、極めて健全な興味を少年少女の胸に湧き立たせてゐる。

わたしがこの書の英訳をはじめて読んだのはまだ学生時代のことだつたので、そのころはまだ子供の教育を痛切に考へて見る機縁が薄く、従つて単にすぐれた良書であると思つただけに止まつたが、後に、自分が翻訳することになつた時には、すでに小学生である子供が自分にあつて、その教育のことに常に考慮を払つてゐたためでもあつたらうか、この書中の父親がいかにわが子の教育のために深い愛情を以て真剣に向つてゐるかがひし〳〵と胸にこたへて感じられた。わたしはこれを翻訳しながら、この父親の深い愛情に対して、幾度感激したか知れない。恐らくは原著者アミーチスにエンリコに比すべき息子があつて、それをば常に心の眼の前においてこの書は書かれたものであらうと思ふ。さもなければ、どうしてかくまでに愛の実感が全篇に漲り溢れてゐよう！　どこのページを開いて見ても、わが子を思ふ愛情が強い健康な脈を搏つてゐる。一字といへども、一句といへども、ことゞくわが子を立派な、すぐれた、申分のない人間に育てあげようとする父親の愛から書かれてゐない言葉はない。

わたしはこの書が少年諸子の最も理想的な愛と純潔との物語であると同時に、真にわが子の将来を思はれる父親母親の方々、及び真にわが教へ子の将来を慮かられる教師の方々にもまた最も深い意義のある読物の一つであらうと信じてゐる。」（「クオレ」序、一～四ペ）

前田晃は、右の「序」を、大正一五年（一九二六）一〇月二八日にしたためている。これによって、「クオレ」の成立・盛行の様子がうかがわれる。

芦田恵之助は、杉谷代水氏の翻訳を通じて、「クオレ」に接し、そこから触発されて、わが国における「クオレ」にあたる、学童読物の創作を思いたつに至った。明治三〇年代半ばころから、つまり二〇世紀頭初から、児童（学童）読物の創作に思いを潜めていた芦田恵之助は、杉谷代水訳「クオレ」に出会うことによって、いっそうその意欲を強められたのである。

三

「童学」暑中休暇日誌」は、文字どおり、一学童の暑中休暇（七月二〇日～八月三一日）の日誌として記述されている。いま、初め・終わりの日誌を引くと、つぎのとおりである。

七月二十日　月曜

雨模様でむしあつい。風もない。

今日からは、まちにまった暑中休暇である。しかし、かうなってみると、何がためにあれほどまったか、わけがわからぬ。ふだんの習慣はふしぎなもので、七時前になると、気がいそ〳〵する。今日からは、休であると知ってゐても、帽子や革袋を見ると、始業時間

におくれはせぬかと思はれる。

机の前にすはって、革袋の中からいろ〳〵の学用品を取りだした。何から手をつけようかと考へると、何事も一時にしはじめなければならぬよーな気がする。しかし、まだ四十日も休があるのだと思ふと、何事も明日にのばしてもよいよーな気にもなる。心のゆるみはこれであらうと考へると、また気がおちつかぬ。そこで、読方、地理、歴史、理科といふ順で、少しづつよんでみたが、何となくつまらない。そこで、時間割をきめようと考へて、次のよーなものをこしらへた。

曜／時	朝の間 食前	朝の間 食後	昼の間	夜
月曜	算術	読方	家事、及運動	日記
火曜	地、歴	書方	同	同
水曜	算術	読方	同	同
木曜	修、理	書方	同	同
金曜	地、歴	読方	同	同
土曜	修、理	算術	同	同
日曜	諸種の会合、遠足等			

これをこしらへて、母様に見せると、

「大層立派ですが、実行ができなければだめです。できるか、できぬかによって、あなたの価値がきまるのです。」

といはれた。

「立派に実行して御覧にいれます。」

と母様にちかった。

終業式の時、校長様のお話に、「早寝早起をせよ」とおっしゃったが、僕は次のよーにきめた。

朝　六時　起床

夜　九時　就眠

それも、人の厄介にならぬよーにとおもって、母様から目覚し時計を借りて、これを力に寝起することにした。

今日は時間割やいろ〳〵規定をこしらへるために、朝の間をつぶしてしまった。

運動には、毎日体操をする考であるから、十時過庭に出て、啞鈴体操の第一運動を二回つづけて、したら、汗がびっしょり出た。そこへ川波君が来た。

「僕は俄に舞子にいくことになったから、お別れに来た。……君、休暇中の時間割は出来たか。」

といふから、今朝からこしらへたのを見せた。すると、川波君は、

「僕も必ずこれを実行する。」

といって、写していった。僕は「川波君にはとても出来ないことがある。」とおもったから、

「君。舞子の別荘には女中が沢山ゐるだらう。家事の手伝って、何をするか。」

といふと、

「毎日何をするかは、くはしく手紙でいっておこさう。」

といって帰った。

今日家事の手伝といっては、夕方にお庭に水をまいたばかりであった。父様が、湯からお上りになって、僕が水をまいてをるのを御覧になって、

「この小僧はいつ雇ひいれたのか。」
とお笑ひになると、母様も笑ひながら、
「苦学生ださうです。」
とお答になった。
これだけの日記を書くに、一時半かかった。これが夜の仕事である。目さましを六時にかけて、床にはいったのは、九時であった。
（同上書、一～五ペ）

八月三十一日　月曜
快晴。
例の時刻に起きて、顔を洗ったところへ杉山君が来て、古教科書が沢山あつまったと報じた。今日もまた奔走するといって帰った。
今日が暑中休暇の最終日である。明日から学校にいって、いろんな遊が出来るとおもふと、うれしくてならぬ、そのせいか、時間割の算術読方の復習をはじめようとすると、心がそは〳〵しておちつかぬ。それも算術は一回すみ、読方は二回まで復習がすんでをるからであらう。
そこで、今日は復習のかはりに、暑中休暇中の回顧といふ題で、文を書くことにした。
まちにまった暑中休暇が来てみると、別にうれしくもおもはなかった。飽きに飽きた暑中休暇がすんでみると、何となく名残がをしい様な感じがする。つまり、人の心は、まってゐるうちが楽しいのであらう。四十三日に亘る長いこの休暇をいかに利用したかといふに、今年は昨年に比して、やや成功であったかとおもふ。そのおもなことは、時間割をきめて復習をしたことである。それがため算術は一回、読方は二回、地理、歴史、理科、修身、書方は各一回復習がすんで、その成績物は、机の上につんである。
おかあさんに誓ったことも、どうかかうか果すことができた。忍耐といふことも、一日一日怠らずつゞけてそれが積めば、大なる忍耐になるのであることもわかった。ことにこの日誌は随分骨は折れたが、他日これを見て、どれほどの思ひ出草になるかとおもふと、非常に愉快である。つまりこの暑中休暇は心配にはじまって、愉快に終ったといってよからう。そして、その愉快は悉く僕の腕で作りだしたものであるから、なほさらにうれしい。
杉山、野山の両友を得たことは、ことにうれしい。人は己にしかざるものを友とするといふかもしらぬが、杉山君でも野山君でも、人物としてはたしかに僕以上である。
忠実なる目さまし時計の功労を厚く賞して、母様に返上した。
これで僕の暑中休暇は終ったのである。
明日学校にもっていく学用品の用意をして、そのわきにその休暇中に作った成績物をつんで、父様と母様とに見ていたゞいた。父様も母様も、
「よく出来ました。」
とほめてくださった。婆やが
「坊ちゃんはきっとえらくおなりなさいます。」
といふと父様が、
「ありがたいね。」
とお笑ひになった。（同上書、一五三～一五六ペ）

「童学暑中休暇日誌」は、およそ前掲二例のような体裁で述べられており、本文中の漢字にはすべて読み仮名が振られていた。促音の「つ」は、やや小さく右の方へ寄せて表記され、本文中に引用された、手紙・作文の類については、段落ごと改行のばあい、一字下げはなされていなかった。

本文は、各ページ三二字詰一三行から成り、すべて一五六ページ、中に、古崖の筆になるさし絵が、つぎのように入れられていた。

1　七月二十二日　水曜　九ページ
2　七月二十四日　金曜　一八ページ
3　七月廿五日　土曜　二三ページ
4　七月廿七日　月曜　三二ページ
5　七月廿九日　水曜　四一ページ
6　八月　九日　日曜　七九ページ
7　〃　〃　〃　八四ページ
8　〃　〃　〃　八五ページ
9　八月十二日　水曜　一〇一ページ
10　八月十六日　日曜　一〇九ページ
11　八月十八日　火曜　一一七ページ
12　八月十二日　土曜　一三一ページ

また、口絵には、「山川の田園生活」と題する、父の郷里で休暇中田園生活をすごした山川（「童学暑中休暇日誌」の筆者春山の同級生）のはたらく姿が描かれている。

四

「童学暑中休暇日誌」の主人公（「日誌」の筆者）は、尋常科六年生の春山真（しん）という男児である。

春山家には、両親のほか、ばあやがいる。兄（敏）は、京都の高等学校（旧制）に学んでおり、姉（花）はすでに横浜に嫁していて、隆坊という赤ちゃんがいる。

主人公春山真には、近くに野山（五年生）・杉山（四年生）という友だちがおり、よく春山のうちへあそびに来る。また、同級生としては、川波・岡部・山川・山野などが登場してくる。

春山真の父親は、七月二三日（木）から北海道へ出張し、二六日（日）には、函館から無事についたとの手紙がくる。やがて八月七日（金）夕方、出張から帰宅する。

京都の高等学校に遊学している兄（敏）は、七月二七日（月）帰って来る。八月九日（日）春山家で催した談話会のおしまいに、兄は、「をさな物語」をしてくれる。八月二四日（月）、京都へ帰って行く。

また、横浜に嫁いでいる姉（花）は、八月五日（水）、赤ちゃんの隆坊をつれて里帰りする。やがて八月一二日（水）、横浜へ帰って行く。

春山家の婆やは、家族同様で、よく春山家にとけこんでおり、子どもからもしたわれている。真と同年の一人子を二歳の折なくしている。七月三〇日（木）、婆やと谷中の墓地に婆やの坊やのお墓まいりに行く。また、八月二〇日（木）、午後、婆やに誘われて、浅草に行き、本願寺におまいりをして、法話を聴聞したり、観音様におまいりをし、昆虫館にもはいったりする。

「日誌」の筆者春山真の同級生は、川波・岡部・山川・山野の四名で、川波は休暇中、舞子の別荘に出かけ、そこから第一信（七月二四日〈金〉）・第二信（八月八日〈土〉）が送られてくる。岡部は尋六で評判の美術家であり、七月二六日（日）、学校で図画手工

の展覧会を開く。八月二三日（日）、第二回の展覧会を開き、いろいろ趣向を凝らし、春山を感心させる。山川は、休暇中、田園生活を送り、第一信を七月三一日（金）、第二信を八月一八日（火）に送ってくる。山川は文語文の名手であり、いずれも文語で手紙をしたためている。八月二五日（火）には、四〇日ぶりに、春山のうちを訪れる。山野は、新華族で、八月一六日（日）、山野のうちで音楽会を催し、春山も招かれて出かける。

これらの登場人物のほか、春山真（主人公）のところへは、毎日のように、下級生野山（尋五）・杉山（尋四）の両名がやってくる。野山は、家は豆腐屋で、評判の優等生である。杉山は非常に腕白者で変物ではあるが、春山にはよくなつき、毎日九時から一緒に体操をする。のちには、野山も加わって三人で体操をしてたのしむようになる。体操だけでなく、理科の実験を手伝ったり、八月二日（日）には、野山も加わって、王子の方へ遠足に行ったりする。杉山はまた、八月三日（月）昆虫採集に出かけ、そこで喧嘩をしてしまう。そのほか、八月九日（日）、春山家で開かれた談話会の手伝いをしたり、幼時からかわいがられた春山の姉に朝顔の鉢を持ってきたり、親密な生活がつづく。八月一〇日（月）には、杉山が病気になり、まわりの人たちから心配され、親切にされるが、八月一九日（水）には元気を回復し、再び三人で朝の体操ができるようになる。八月二五日（火）ころから天候があやしくなり、やがて暴風雨になり、多くの被害が出る。旧師中野先生とその生徒のため、子どもたちは義捐活動をしたりする。

夏期休暇中、教育招集日（いわゆる登校日）は、八月一日（土）、八月一一日（火）、八月二一日（金）の三回設けられており、担任の先生から、暑中休暇中の生活指導・学習指導がなされている。

五

春山真は、毎日の〝日誌〟をつけるにあたって、まず天候のことをしるし、つづいて、食前・食後の復習のことを述べ、体操のことを記し、その日の主な出来事をとりあげて叙していく。日によっては、夕食後のこと、日記のことにも触れられている。

いま、毎日の〝日誌〟にとりあげられた主な話題・出来事を見ると、左のとおりである。

七月二十日（月）

○「雨模様でむしあつい。風もない。」（一ペ）
○暑中休暇を迎えて、日課（時間割）の作成。
○体操。
○同級生川波君来訪―舞子へ出かけるという。
○家事の手伝い―夕方庭に水をまく。
○就床九時。

七月二十一日（火）

○「降りはせぬが、空一面の雨雲で、頭をおさへられたよーである。」（五ペ）
○食前・食後の復習。
○体操。
○昆虫採集へ。途上、尋五の野山君に会う。
○岡部（尋六）からはがき。手工図画展覧会の案内。
○午後、図画（野山君を画題とした）を一枚かく。
○「夜は日記をかいて、九時にねた。」（八ペ）

3 七月二十二日（水）
○「快晴。そのがはりに暑い。」（九ペ）
○食前・食後の復習。
○父、明日、北海道へ出発。そのための手伝いをする。
○夕食時の、父のことば、父の心づかい。

4 七月二十三日（木）
○「天気昨日のごとし。」（一一ペ）
○父の出発を上野まで送り、不忍の池を見て、帰宅する。
○食前・食後の復習。
○体操をしていると、尋四の杉山君（隣の染物屋のひとりっ子）が来る。一緒に体操をする約束をする。
○体操の後、理科実験の準備をする。
○婆や、真のことばに感じて、涙をぬぐう。婆やのやさしく涙もろい性格。
○「晩になっては、父様の留守なので、何となくさみしい。母様と婆やと僕とで、一室に集って、いろ〳〵話をして、七時過から日記をつけた。」（一六ペ）

5 七月二十四日（金）
○「朝から雨。母様の話には、昨晩僕がねて間もなくふりだしたとのことである。」（一六～一七ペ）
○食前・食後の復習。
○体操、三回くりかえした。
○川波君（尋六）、舞子からの第一信。
○杉山君に川波君からの手紙を読んで聞かせる。
○午後、川波君へながいながい手紙を書く。
○「夜は例のごとく、日記をつけた。」（二〇ペ）

6 七月廿五日（土）
○「快晴。雨後の草木はことにうつくしい。」（二一ペ）
○「僕はこの頃朝おきると、すぐ郵便箱をあけにいく。それは、友人からの手紙も待ってはゐるが、父様からの便が、わけてまちどほしいからである。」（二一ペ）
○食前の復習——修身のほか、理科の実験をする。助手として、生徒として、杉山君がいたから大いにおもしろい。
○食後の復習—算数。
○母親の洗張りの手伝いをする。
○婆やのことば、婆やのこと。
○「日記を書くと、今日は少々ながかったので、九時少し過ぎた。」（二八ペ）

7 七月廿六日（日）
○「今日は暑中休暇後はじめての日曜で、天気は快晴である。」（二八ペ）
○学校で図画工作の展覧会開かれる。午前中、参加する。
○昼食時、父からの手紙がくる。
○「晩は日記を書いて、九時まで遊んだ。」（三一ペ）

8 七月廿七日（月）
○「快晴。」（三一ペ）
○「今日は兄様が京都から帰られる日なので、母様はじめ婆やも僕も、皆うれしくて、何となく家のうちが生き生きして見える。」（三一ペ）
○食前・食後の復習。
○体操。

○手伝い――兄の机や書棚をよく整頓する。
○兄の帰京を新橋駅まで迎えに行く。
○兄の帰宅。
○横浜にいる姉に、里帰りしてほしいとのはがきを書く。

9
七月廿八日（火）
○「天気昨日のごとし。」（三六ペ）
○食前・食後の復習。
○体操―杉山君のほか、野山君（尋五）も来る。二人の間、春山のとりなしで和らぐ。
○野山・杉山両君の話、はずむ。
○午後、兄から京都名所の話をきく。
○横浜の姉から、はがき（返信）とどく。

10
七月廿九日（水）
○「快晴。一点の雲もなし。」（四〇ペ）
○「兄様が帰られたから、何だか仕事がふえた様な気がする。それは、兄様のひま〳〵にお話をきいたり、散歩したりしなければならぬからである。これまで唯一人で散歩をしても、一向つまらなく思ったところも、兄様とあるくと、実におもしろい。」（四〇ペ）
○食前・食後の復習。
○体操―今日からは三人（春山・杉山・野山）でする。
○金魚屋から一〇匹金魚を買ってもらう。
○「兄様と二人ではたらいてゐると、母様がこれを御覧になって、『さうして遊んでゐるところは、まるで坊ちゃんです。』とおっしゃった。
『姉様がゐて、水くみの手伝をして下さったら、私が七つ位の時そっくりですね。』
といったら、母様がお笑ひなさった。
その他別に変ったこともない。」（四三ペ）

11
七月三十日（木）
○「快晴つづきて、暑さはことに強い。」（四四ペ）
○食前・食後の復習。
○婆やの坊やのめい日、午後婆やと共に谷中の墓地におまいりをする。
○「お墓にまゐって、それから、谷中のお団子を御馳走になった、帰って母様にお墓まゐりの話をすると、『婆やはほんとーにかはいそーなものです。大事にしておやりなさい。』とおっしゃった。」（四六ペ）

12
七月三十一日（金）
○「晴れてはゐるが、何処か雨が近くなって来た。」（四六ペ）
○山川君（尋六）から封書（第一信）きたる。
○食前・食後の復習。
○午後、家のまわりの草とり・掃除をする。
○「夜は日記を書いて少し涼んでからねた。今夜はことにあつい。」（四九ペ）

13
八月一日（土）
○「快晴。」（四九ペ）
○教育招集日―午前七時過ぎ学校へ。先生から休暇中の心得について話がある。休暇中の生活を各自発表する。一二時に帰宅す

る。
○「二時過になって、天候がにはかに変った。空は一面に墨を流したよー。やがて雷なり、電ひらめいて、非常にすさまじい。強い風が、土手の並木にすごい音をたてて吹くと、大粒の雨が豆でもまくよーに降って来た。雨が一秒ごとに強くなって、三十分ばかりは篠つくよーな大雨である。軒の雨だれは滝のごとく、表の溝には濁流があふれてゐる。
　十分ばかりの後には、雨が全くやんで、空にはところ〳〵に青雲が見えだした。雀も鳴きはじめる。燕も飛びはじめる。世はもとの世になったが、涼しいのと、空気があらはれてきれいなのと、葉末に露の玉がきらめいてゐるのとは、まことに心もちがよい。」（五一ペ）
○「清き月のさしいる縁側で、夕食をして、例の兄様の京都ばなしをきいた。」（五一ペ）
○「日記を書いて九時にねたが、今日の夕立でことに涼しく、ねごこちがよい。」（五一ペ）

14 八月二日（日）
○「快晴。地はしめりを帯びて、塵はたたず。遠足にはあつらへ向の日である。」（五二ペ）
○王子への遠足（午前五時半〜午後四時前）。
○「入浴して今日は早く眠らねばならんと思って、夕食をすませて、一時間の後、床についた。疲れたのか、睡くて〳〵仕方がなかった。」（五五ペ）

15 八月三日（月）
○「快晴。」（五五ペ）
○「めざまし時計は実に忠実なものだとおもふ。毎朝六時がなると、僕をよびおこしてくれる。いやな顔もせず、疲れた振も見せず、実に忠実なものである。僕も時計のよーに、根気がよくなればよいとおもふ。」（五五ペ）
○食前・食後の復習。
○体操。
○昆虫採集――途上、杉山君がほかの五人の子どもたちと喧嘩をする。
○「帰る道々、喧嘩の原因をきいて、人を冷かしたり、馬鹿にしてはいけないといふことをいひきかせた。
『君。あの場合、どうする気であったか。』ときくと、『僕は逃げるといふことがきらいだから、力のつづく限、たたきふせてやらうとおもってゐた。』
といふ。僕は杉山君が実に男らしい男であると、この時からさらに強く感じた。
　今日は、この外に（引用者注、つまり、杉山君のした喧嘩事件のほかに）書くことはない。九時にねた。」（六〇ペ）

16 八月四日（火）
○「天気昨日のごとし。」（六一ペ）
○食前・食後の復習。
○体操。
○昆虫採集――春山ひとりで出かけ、蝶を数羽とる。
○夕方、横浜の姉から、明日午前中行くとの手紙がくる。

17 八月五日（水）
○「朝起きて見ると、雨模様である。降りもせば、姉様がおこま

りになるだらうと心配しながら、日課にかかった。」（六三ペ）
○食前・食後の復習。
○体操。
○午前中、姉里帰りしてくる。ことし一月に生まれた、隆坊という赤ちゃんをつれてくる。
○「今日は坊のあいてで、日が暮れた。夕食の時は、坊がかきまはすので、さらに賑やかであった。姉様と母様とは女同士で、話がたえぬ。母様が婆やに、
『お夜食の用意をしておいとくれ。花は子持だから。』
とおっしゃった。その御飯が夜中坊の飲むお乳になるのかとおもふと、僕がお給待（ママ）をしてあげたいくらゐにおもった。」
（六六ペ）

18
八月六日（木）
○「今日、終日、雨。明日は父様の帰らる日なのに、道中雨でさぞさみしいだらうと、それがきにかかる。しかし、坊の寝顔を見ると、また何も忘れてかはいくてならぬ。僕は夏休になってから、母様に一度もお小言をいただいたことはないが、坊の寝顔をいぢった時には、『いけません。』と叱られた。叱られても、いぢりたくてならぬ。」（六六～六七ペ）
○食前・食後の復習。
○体操。
○姉と杉山君との対話。
○「僕はもう何処にもいきたくはない。うちで坊の守（ママ）をするのが、何よりもおもしろい。」（七〇ペ）

19
八月七日（金）
○「晴。雨雲はなほところ〳〵に浮いてをる。」（七〇ペ）
○「六時におきると、坊がおきてゐた。婆やがだいて庭をあるいてゐたから、僕がいってからかうと、高い声をたてて笑った。」
（七一ペ）
○食前・食後の復習。
○「体操例のごとし。」（七一ペ）
○父、夕方六時に上野に着く。兄・姉・坊や・婆やと共に迎えに行く。
○「昨晩までは父様の座がかけてゐるので、賑やかなうちにも何となく淋しかったが、今夜は何一つ不足がないので、一同思ふままに語った。月は庭の松をとほして、膳の上に涼しい影を投げてゐる。」（七二ペ）
○「日記を父様の御覧にいれた。忍耐とか剛毅とかいふことは、かうして養ふものであるとおっしゃった。」（七二ペ）

20
八月八日（土）
○「快晴。風涼し。」（七二ペ）
○「父様と僕とで坊をあやしておると、姉様が来て、
『父様。おしっこをするといけませぬ。』といはれると、父様は、
『お前だって、父様の膝におしっこをしたことがあるのに、坊がしたってよろしい。』
とおつ（ママ）しゃった。姉様は顔をかくして、奥へいっておしまひになった。すると、奥では母様と婆やと、そして姉様の声とで、大笑がはじまった。」（七二～七三ペ）
○食前・食後の復習。

○「体操は三人共に熟練の度がすすんで、うまくなった。父様は御覧になって、たいそーおほめになった。北海道の絵葉書一組づつを御褒美としていたゞいた。」（七三ペ）
○川波君（尋六）、舞子から第二信。
○川波君へ返事を書く。
○「その他はすべて例のごとし。」（七六ペ）

21
八月九日（日）
○「快晴。」（七六ペ）
○杉山君、りっぱな朝顔を二鉢持って来てくれる。
○隆坊をあやしてあそぶ。
○午後、春山のうちで、談話会を開く。参会者二〇名ばかり。兄も、「をさな物語」をしてくれる。
○「今日の日曜は面白く暮した。夕食後、すぐ日記にかかったが、今日のは甚だ長いので、九時過（ママ）までかかった。少々あきたが、『今日のことは今日してしまふ。』といふ僕の主義を、がまんして、実行した。しあげて見ると、その愉快は実に無限である。」（八七ペ）

22
八月十日（月）
○「朝から雨少しふる。からだのだるい天気であった。」（八七ペ）
○「天気がわるくても、隆坊さへゐれば、僕には苦にならぬ。まだ坊がよく寝てゐるから、一寸起さうとすると、常には何事でも僕に反対をしたことのない婆やが、『起してはいけませぬ。』といって叱った。」（八七ペ）
○食前・食後の復習。
○体操――杉山君（尋四）が来ない。病気臥床している。
○「医師の診断は中々に軽くはなかった。すてておけば、窒扶斯になるかもしれぬ、といはれたさうである。僕は杉山君のそばにいって、慰めたり、介抱もしてやりたいが、なるべく人を近づけぬ様にとの医師の注意で僕は病床に行くことを禁められた。僕はこの日野山君にもこの事を知らせて医師の薬採（ママ）や、その他、手に適ふことは杉山君の家の手伝（ママ）をすることにした。」（九一ペ）

23
八月十一日（火）
○「快晴。」（九二ペ）
○六時起床後、隣の杉山君のうちに行き、杉山君の病状をきく。
○教育招集日――午前八時、教室に集合。復習状況を先生に報告。一〇時から学校園の手入れをする。
○午後、杉山君の薬をもらいに、医院へ行く。
○夜、明日横浜へ帰る、姉と坊やを囲んで一家団欒。
○「隆坊が膳の上の汁を飜（こぼ）したので、母様が、『おや〳〵。仕様がないね。』とおっしゃると、姉様も一寸坊を睨むまねをしられた。すると、隆坊はうれしさうに笑った。兄様が、『隆ちゃんは神様だね。』といはれると、父様は、『あれでなくては大きくなられぬ。お前たちも皆あの通りだったのさ。』とおっしゃった。」（九七ペ）

24
八月十二日（水）
○「よい天気である。」（九七ペ）
○杉山君の病状をたずねに行く。
○食前・食後の復習。
○体操――野山君（尋五）と二人でする。
○姉が横浜へ帰るのを停車場まで見送る。
○杉山君を見舞い、姉のことばを伝える。
○「日記をつけた。坊がゐなくなって、姉様が帰っておしまひになって、おまけに婆やが留守だからさみしい。」（一〇一ペ）

25
八月十三日（木）
○「天気よし。」（一〇一ペ）
○野良猫に金魚がやられているのを発見する。
○食前・食後の復習。
○体操。
○野山君と二人で、杉山君を見舞う。
○「今日は婆やが帰って、姉様から学童日誌といふ本をもらった。外には別に記すべきことはない。」（一〇二～一〇三ペ）

26
八月十四日（金）
○「雨。」（一〇三ペ）
○「隆坊がゐないし、杉山君がよくなったし、万事ひまになった。その上、雨が降ってゐるから、出あるきもならぬ。」（一〇三ペ）
○食前・食後の復習。
○体操――野山君と二人でする。
○「今日は雨で、であるきもならぬから、姉様からもらった、学童日誌を読んだ。これは伊太利の文学者の書いたものを、国文に訳したものだと序文にはあるが、まるで日本のことを書いたよーである。そのうちの少年愛国者などは、読んでゐると、肉が動くほどにおもしろい。
　僕は従来少年の読物をよまぬではなかったが、あまりにとりとめもつかぬ冒険談や、魔法使のことなどは、好かないので、赤穂義士談をくりかへし読んでゐた。今この学童日誌を得て、いくらか日本風とちがった面白みを感ずるとともに、これをもくりかへし読まうと決心した。」（一〇四ペ）
○杉山君に、「学童日誌」の中の「少年愛国者」を読んできかせる。

27
八月十五日（土）
○「今夜は日記を書いて、はやくねた。」（一〇五ペ）
○「昨日と同じく雨。」（一〇五ペ）
○食前・食後の復習。
○「体操例の通。」（一〇六ペ）
○杉山君の家に出向いて、「学童日誌」の中の「病院」を読んできかせる。
○「帰っても何もすることがない。学校の休もかう永くてはあきいとおもった。
　雨で出るきにもならぬ。夜は日記をつけて早くねた。」（一〇七ペ）

28
八月十六日（日）
○「やう〳〵霽れた。」（一〇七ペ）

○山野君（尋六）のうちで開かれる音楽会に招かれて出かける。春山真は、すすめられて、「箱根の山」・「虫の楽隊」を独唱する。

○「たゞ不快に思ったのは、山野君が女中をつかふに、甚だ酷であると感じたことであった。下女だって大切な人の子である。山野君と父様との関係は、下女と下女の父との関係と少しもかはったことはない。どんなことをいっても、下女は服従するけれども、それは山野君が大に慎（ママ）まねばならぬところだとおもった。」（一一一ペ）

○「杉山君が待ってゐるだらうと思って、いってみると、ひよろ〳〵する様なあしもとで、朝顔の世話をしてゐた。

『君。そんなことしてもよいのか。』

といふと、

『少しはよいとお医者様がいった。』

といふ。僕もそのそばで色々手伝ひながら、今日の話をしたら、杉山君も大そー面白がって聞いてゐた。」（一一一～一一二ペ）

29 八月十七日（月）

○「晴。」（一一二ペ）

○食前・食後の復習。読方では、第四課をなるべく短くまとめようと試みる。

○体操――杉山君も来て、二人の体操を見る。

○夕方から、野山君（尋五）のうちへ出かける。

30 八月十八日（火）

○「一時間ばかり遊んで帰った。八時から日記を書いて、九時にねた。」（一一五ペ）

○「快晴。暑さがことに甚だしい。」（一一五ペ）

○食前・食後の復習。

○山川君から第二信（文語文）きたる。

○「僕も来年は父様のお国で、山川君の様な生活をしたいとおもふ。いつぞや先生が、『土臭い人は、身心ともに健全である。』といはれたが、山川君のことを思ひあはせて、ことにその意味が深いとおもった。」（一一八ペ）

31 八月十九日（水）

○「天気昨日のごとし。」（一一八ペ）

○父から復習後警察署に行って来るよう言われる。

○食前・食後の復習。

○「体操には杉山君が、加はるよーになって、今日よりは元のよーに賑やかになった。三人のうれしさは、口にいはねど、皆同じである。」（一一九ペ）

○警察へ行って、春山家の盗難品（干してあった単衣物と帷子（かたびら））を受け取って帰る。

○「夜は日記をかいた。今後警察の御用はなるべく御免を蒙りたいものであると感じたから、それも書きつけておく。」（一二〇～一二一ペ）

32 八月二十日（木）

○「天気よし。風少し吹く。」（一二一ペ）

○婆やから午後浅草へ行こうとさそわれる。

○食前・食後の復習。

○体操――三人でする。

○午後、婆やと浅草へ。本願寺におまいりし、観音様へ。ついで、昆虫館を見学する。

○「夕食後にその絵葉書（引用者注、昆虫館で婆やに買ってもらった、五枚の昆虫の絵はがき）を見せながら、今日の話をすると婆やが、

『負（ママ）た子に教へられて虫の学問をいたしました。』

といふ。母様は、

『ほんとーに三年も五年も負ふた子だはね。』

といって、笑ひなさった。（一二六ペ）

33 八月二十一日（金）

○「快晴。」（一二六ペ）

○教育招集日――七時すぎ学校へ。休暇中の所感を発表させられる。

○先生のお話があった。

「君たちはこの休中に、おもしろいと感じたこと、美しいと思ったことは、それ〳〵文に作るとか、絵に書くとかしたでせうね。その文や絵は年を経て今日を思ひ出すたよりになって、まことにたのしいものであります。

我国（ママ）には俳句といって、十七字でその文や絵のかはりをするものがある。皆さんが大きくなって、かういふことに心がけたら人の知らぬ楽（ママ）みをすることが出来る。子を失った母の句に、

『とんぼつり今日はどこまでいったやら。』といふのがある。その心は隣近所の子と日々とんぼをつりにいった我が子がなくなって、非常にかなしんでゐたが、或る晩とんぼつりの仲間が大勢帰ってきた。ふと我が子のことを思ひだして今日はどこまでいったやら帰りがたいそーにおそいと思った。その刹那に、死んでしまったのだときがついて、いつまで待ったとて帰って来ることはないと、たいそーなげいた句である。

文字のおもてには涙は見えてゐないが、子を失った親の心は、かうもあらうとおもはれる。」（一二八ペ）

○「僕はこれを聞いて、俳句はおもしろいものであるとおもった。午後はなすこともなく暮した。」（一二八ペ）

○夕食時、兄が家にいるのはもう二日しかないと言う。

○「御飯中に僕が今日学校できいて来た『とんぼつり』の句を話すと、婆やが大そー感心してゐた。」（一二九ペ）

34 八月廿二日（土）

○「晴。」（一二九ペ）

○兄に、手伝い方を申し出る。

○食前・食後の復習。

○体操。

○兄の用事をする。

○昼食後、犬の子が庭にはいってくる。それを追っかけて来た悪太郎らと言い合う。やがて飼主のうちの書生がつれに来て、落ち着く。

35 八月廿三日（日）

○「晴。快晴つゞきで暑い。雨気がなくて、草木がしをれる。」（一三三ペ）

○図画手工の展覧会を見るため、学校へ。

○昼食、兄・兄の友人四名を囲んでする。

○席上、父の書生時代の話をきく。

36 八月廿四日（月）

○「快晴。今日の様に暑くてはたまらぬ。」（一三六ペ）

○食前・食後の復習。
○体操――兄の京都への出発を見送るため、省く。二人（野山・杉山）も新橋まで送りに行ってくれる。
○兄の見送り。
○「昼の間は別に気もつかなかったが、夕食のときに、兄様の座があいてをるので、何となく淋しく感じた。人が増すのはよいが、減るのは僕は大きらいである。」（一三九ペ）

37
八月廿五日（火）
○「朝来天候があやしい。十数日つゞいた快晴は、昨夜のうちにかはって、西南の空からはき出す雲は、陰悪（いんあく）の相をあらはしてをる。風になるのか、雲足がはやい。」（一三九～一四〇ペ）
○食前・食後の復習。
○「ことに僕の前学年まで教へていただいた先生のお国は、非常な水害地だときいてゐるが、先生はいまその地に校長をしてゐられるので、天候の険悪、暴風雨、水害、旧先生といふ順で、何だかきにかかる。もう二百十日まではまもないから。」（一四〇ペ）
○体操。
○山川君（尋六）、田舎から帰って来て、たずねてくる。
○「夕頃までは、さして大雨といふほどではなかったが、夜にいっては、中々にひどい。この様子で今夜中降れば、諸川には必ず多少の水害を見ることであらう。」（一四三ペ）

38
八月廿六日（水）
○「降るといっても、度がありさうなものをと思はれるほどに降った。風さへ加はった。新聞の天気予報は暴風雨とあった。」（一四三ペ）
○食前・食後の復習。
○体操――風のため、杉山君も来ない。一人でする。
○「午食をしてをると、一きはつよく風がふいて、物置のところの板塀をたふした。戸のすきから見ると根こぎになった庭の木も少くない。風は電話や電信の銅線（はがね）に怒って、幾万の猛獣が吼えるよーである。午後もこの状態がつゞいて、夜に入った。」（一四四ペ）

39
八月廿七日（木）
○「雨も風もまったく止んで、日光は弱く照してをる。母様にきくと、昨夜十二時過（ママ）から風はやんで、雨は三時頃からまったく止んだとのこと。」（一四五ペ）
○被害甚大。
○食前・食後の復習。
○体操――三人でする。
○夕方、水害見舞の電報を旧師にうつ。

40
八月廿八日（金）
○「快晴。暑さは暴風雨前のごとし。」（一四七ペ）
○食前・食後の復習。
○「復習をしてしまふと、先生からの電報がついた。
『イヘマツタクミヅニツカル　ヒサン　ミナムジ　ナカノ』
父様に見せると、
『それでは食ふものがあるまい。』
といはれたので、僕の貯金から二円だして、鰹節をかって、小包に出した。郵便局員は四日かかれば到着するといった。
今日は体操を廃して、こんな奔走に日を暮した。夜は日記を

かいて九時にねた。」　（一四八～一四九ペ）

41 八月廿九日（土）

○天候の記事なし。

○野山・杉山両君と相談し、今の受持の先生にも相談して、旧師中野先生に古教科書を送ることにする。

○午食後、復習をする。

○中野先生から、「ヨキニタノム」という返電あり。

42 八月三十日（日）

○「六時に起きて、新聞を見ると、水害の記事で全紙うづまってゐた。」（一五一ペ）

○七時学校に行き、学級会で、休暇中の話をする。

○さっそく救援活動を始め、盛りあがる。中野先生へ手紙を書く。

43 八月三十一日（月）

○「快晴。」（一五四ペ）

○杉山君、救援のための古教科書あつめに奔走する。

○復習のかわりに、「暑中休暇中の回顧」という題で、文章を書く。

○休暇を終わるにあたって、父・母「、」婆やのことば。

暑中休暇四三日間、春山家を中心に、学童真は、毎日のみずからの生活を記して、単調に流れず、変化に富むものとなっている。

毎日朝六時に起床し、朝食の前後に復習を位置づけ、体操をし、家事を手伝い、夜は日記をつけて九時に就床する。この日課を原則として忠実にまもりながら、その間に、父の出張、兄の帰省、姉の里帰り、婆やとの外出、級友からの来信、暴風雨の襲来、水害の義捐活動などを織りまぜて、一学童の休暇中の家庭生活を多彩ならしめている。

「日誌」の筆者である春山真は、両親・兄姉（甥にあたる隆坊）・婆やに恵まれ、素直で明るく、ユーモアのある、典型的な小学生（学童）として描かれている。日々の学習・運動・手伝い・経験・人間関係をいきいきと楽しんでいる。

春山のうちに毎朝来て、真少年と一緒に体操をする、下級生二名（野山〈尋五〉・杉山〈尋四〉）は、この「日誌」の中で、三人組として描かれ、暑中休暇中の子どもの生活をよく写し出す結果となっている。とりわけ、一般に誤解されやすい杉山（尋四）と春山（尋六）との心の交流は、単なるきれいごとではなく、克明に描かれている。「日誌」の中で、もっともいきいきと描かれているのは、杉山（尋四）少年であるともいえよう。それは芦田恵之助の子ども理解の的確さ・深さをものがたる。

日曜日は、他の週日（月～土）とはちがって、諸種の会合・遠足などにあてられていた。すなわち、

1　七月廿六日（日）―図画工作展覧会（一）
2　八月　二日（日）―王子への遠足
3　八月　九日（日）―談話会
4　八月十六日（日）―音楽会
5　八月廿三日（日）―図画工作展覧会（二）
6　八月三十日（日）―学級会

のように、バラェティに富む会合・催しなどを設けて、暑中休暇中の学童たちの生活に活気あらしめている。

毎日の日記の書き出しも、天候から始められているが、その述べかたも一つ一つくふうされていて、変化に富んでいる。復習・体操に

ついての述べかたも、決して単調ではなく、一日のおわりの結びかたも、自然であるが、よく読めば、随処にくふうの跡がうかがわれる。

「学童暑中休暇日誌」は、まぎれもなく学童（ここでは、春山真少年）の筆に成る〝日誌〟としての形態・体裁をとりながら、その内容・内実は、興味深く息もつかせず読ませる児童読物となっている。芦田恵之助は、少年たちを主人公にしながら、明るくおだやかな思いやりにあふれた家庭を描きえている。

六

さて、春山が級友山川（尋六）から受けとった書信は、いずれも文語文で書かれていた。ここにその手紙文を掲げる。

第一信　七月三十一日（金）

君に別れをも告げず、今日が日まで音信をもせざりしは、君を大に驚かせん僕の計画なりき。

君は僕が必ず大磯あたりに海水を浴みて暮せるものと思ひしならん。されど、その想像はあたらず。僕は今父の郷里にありて、一農夫となれり。一労働者となれり。田園の趣味と労働の価値とは過去の一週間にこれをさとれり。今夏かくてこゝに過さば、僕は立派なる農夫とならん。請ふ新農夫の語るところを聞け。暁風青田の上を吹きて、稲葉の末の露をはらふ時、鍬を肩にして畦をゆく心よさ、空気は清く、肌すゞしくして、何物の快楽かこれに増すものあらん。これ農夫が早起の報酬としてうくる宝なり。

十一時頃田より帰り、午後一時過再び田に出でて働く。その暑さに耐え難からんとは、避暑よ避寒とさわぐ都の弱虫のいふことなり。菅笠一枚の蔭には、いふべからざる涼味あり。ことに青田をわたる風の涼しさは、田草とりてはじめてさとることを得るなり。

夕頃山寺の鐘を合図に仕事をやめて帰る。野道遠ければ、月のいづることもあり。田毎にかがやく月、流にうつる月、これ田園に夜おそくまで働くもののうくる宝なり。

もし水気の涸れんとする畑に水を入れて、その習朝の作物を見んか。そのいき〳〵したる様は、実にたとふるにものなし。作物の風にゆらぐは、感謝の意を表はすがごとくにうれし。

なほ報ずべきこと多けれども、次便に譲る。

（同上書、四六～四八ペ）

この手紙について、春山真は、「山川君は文語文の名手として、尋六中の評判者であるが、実に自由なものである。僕などの到底及ぶところではない。」（同上書、四八ペ）と述べている。

第二信　八月十八日（火）

新農夫の第一信は、都に無聊を苦しむ君に、多大の感興を与へたるがごとし。　さらに第二信によりて、田園の趣味のいかに深きものなるかを報せん。

快晴十日に亘らば、菜園雨をまつこと切なり。さらに数日あめなくば、稲田の水は涸れて、亀裂を生ずる所多し。農民の雨をまつの情は理の外なり。一夕大雨至りて、菜園は生気にみち、稲田水あふるれば、農民は雨を祝して、こゝに一日の休養をなすなり。もし菜園の地上にありとせば、その光景は即ち此のさまなり。午睡をむさぼるあり。小川に釣するあり。心の合ふ友と語らひて、近郷の社寺に参拝するあり。午睡は灌漑のこと急なるがために、安き眠を得ざりし疲労を医するなり。雨後の小川は魚あつまってのぼる。ここに釣をたるれば、意外の獲物なきにあらず。獲物に鮒あり。はやあり、

もつあり、鮗あり、まれには鯉もあり。その獲物は一家夕食の膳をにぎはすに足るなり。社寺に参拝するは、神仏の恩恵を謝するの意なり。雨を得て人も草木も蘇生の思をなすは、一に神仏の加護とするなり。その心のいかに清くうるはしきことよ。

余の新農夫生活も僅かに数日をあますのみ。余は余の耘りし菜園及耕せし稲田に分るることつらし。そのいかに花さき、いかに実を結ぶかを見ずして去るがために。

（同上書、一一六～一一八ページ）

この第二信について、春山真は、「山川君は実に愉快な避暑をしたとおもふ。否。有効な避暑をしたとおもふ。この頃米国では、海岸或は山巓の避暑がすたれて、農村の避暑といふことが盛になったと、今朝の新聞に見えてゐた。僕も来年は父様のお国で、山川君の様な生活をしたいとおもふ。」（同上書、一一八ページ）と述べている。

級友山川からの手紙によって、夏の田園生活が具体的に紹介されるとともに、都会生活に終始している春山の視野が広げられている。

また、級友川波は、舞子から、第一信（七月二四日〈金〉）・第二信（八月八日〈土〉）を送ってきて、夏の海浜生活のすばらしさをつぶさに告げる。口語文で書かれた手紙であるが、山川からの文語文の手紙に決してひけをとらない、巧みな書きぶりである。

「童学暑中休暇日誌」は、春山家の都会生活を主軸としつつも、春山真の級友山川・川波などの田園・海浜からの手紙によって、新しい生活領野が具象的に描かれており、その生活への視野は狭少ではない。

加えて、八月九日（日）の春山家における談話会で、兄の話した「をさな物語」や八月二一日（金）の学校での先生の俳句についてのお話や八月二三日（日）の父の書生時代の話など、折にふれての適切な話によって、時間的に過去に自在にさかのぼることもでき、子どもたちの考えかたがふくらんでいくように配慮されている。

「日誌」においては、学童春山真を主人公とする暑中休暇生活が狭く単調に堕さないように、広くゆたかなものとして具象化させようと、芦田恵之助によって縦横に構想され、考案され、くふうされている。

七

芦田恵之助の「童学暑中休暇日誌」執筆の動機がアミーチスの「クオレ」に求められることは、すでに見てきたとおりである。しかし、アミーチスの「クオレ」が、一〇月の巻に始まり、一一月、一二月、一月、二月、三月、四月、五月、六月、七月の巻におわっているのに対して、芦田の「暑中休暇日誌」は、いってみれば、「クオレ」にはない、暑中休暇生活をとりあげているのである。

芦田恵之助は、明治三五年（一九〇二）一二月一七日、「試験やすみ」という児童読物を金港堂から刊行している。これは懸賞募集に応じて入選した作品であるが、内容は「童学春休み日誌」とでもよぶべきものであった。「童学暑中休暇日誌」の原型は、すでにここに具体的に存在していたのである。

「試験やすみ」（つまり、「童学春休み日誌」）は、その刊行後満五年半をへて、「童学暑中休暇日誌」として、質量共にいっそう充実した本格的な児童読物として結実したともいえよう。

それにしても、アミーチス原作の邦訳「学童日誌」を姉から贈

られ（八月一三日）、雨の日に、それを読ませ（八月一四日）、さらにその中の「少年愛国者」・「病院」を杉山に読んできかせる（八月一四日・一五日）など、芦田恵之助の細密な心づかいには、感じ入ってしまう。

八

「童学暑中休暇日誌」中、春山真は、毎日（日曜を除く。）朝食の前後に予定をたてて復習を規則正しくつづけている。「読方」のばあいは、「高等小学読本」巻三（尋六用）のうち、

第一課　伊勢神宮
第二課　楠木正行とその母
第三課　蜜蜂
第四課　虫の農工業
第五課　蠅と蜘蛛とに助けられた話
第六課　昆虫の変態
第七課　奈良
第八課　鳥居強右衛門
第九課　親切の報
第十課　水成岩火成岩
第十一課　がらすの製法
第十二課　秀吉ノ逸事
第十三課　須磨明石
第十四課　夏の一日
第十五課　ふかに追はれた話

をとりあげて、二回復習をしている。まず第一回の復習を八月一〇日（月）で一応すませ、第二回めは八月一二日（火）から課ごとに暗誦すべきところを書き抜いたり、暗誦したり、いろいろくふうを加えて読むことの学習を進めさせている。「読方」の復習として、入念に的確になされていることは、当時の芦田恵之助の国語学習観を反映していて、注目させられる。

また、八月二日（日）の王子への遠足には、「往きに西原農事試験場を見る」ことが予定され、そのことに言及されている。この西原農事試験場には、芦田恵之助は、すでに明治三九年（一九〇六）四月入学の第一回生の春の遠足をしていた。その折のことが、「日誌」にもとりあげられているのである。

八月二五日（火）・二六日（水）から始まった暴風雨のこと、水害義損のことについては、芦田恵之助自身、明治二九年（一八九六）八月三一日・九月一日の福知山大水害を経験しており、その時の水害の惨状は、のち「丙申水害実況」として、つぶさに記述された。「日誌」所収の水害の記事には、こうした芦田恵之助の深切な経験がふまえられているのである。それは単なる思いつきに発するものではない。

九

「童学暑中休暇日誌」については、市原豊太氏が、その小学生時代愛読され、そのころを回想して、つぎのように述べていられる。

「近所の書店には無かったので、この本は態々発行所である日本橋（引用者注、京橋区南伝馬町二丁目五番地）の目黒書店まで買ひに行きました。その頃の東京の下町には蔵づくりのどっしりした問屋などが多かったのですが、目黒書店もさういふ一つであったことを憶えてゐます。この本も実に愛読し、或る部分は今でも文章の侭を暗誦することが出来る程です。」（「増補版　綴方十二ケ月の意義と価値」、昭和47年8月15日、文化評論出版刊、市原豊太氏稿「深い長い御縁」、二六〇ぺ）

なお、市原豊太氏は、この「日誌」について、雑誌「人間」（昭和二四年六月号）にくわしく述べておられる。そのことを、青山廣志氏が「法楽寺の芦田恵之助先生Ⅳ」（昭和47年1月30日、大阪恵雨会刊）において述べていられる。

それによれば、市原豊太氏は、つぎのように「日誌」中印象深かった部分を挙げておられる。

「『暑中休暇日誌』は一人の小学上級生が夏休中の生活を日記体に細叙した形式で、その家庭のことや、行楽などを変化に富む内容にして、淡々と少しも取繕はぬ文体で描いてゐる。これは芦田先生がアミーチスの『クオレ』を読み、それから着想されたものであることを後に知ったが、全然日本風に換骨奪胎したものであった。

例へば、京都の大学で勉強してゐる主人公の兄が帰京して鳩居堂の筆や墨を土産に呉れ、夕食のあと涼みながら加茂川の話になると、『おおそれよ（といふ言ひ方だったと憶えてゐる）加茂川は隅田川の趣とは全くちがふ、清い水が草原の間をやさしく音を立てて……』といふやうに語るところもある。

或日は昔の乳母と浅草へ行き、花やしきや昆虫館を見る。老女が蝶や蜻蛉の標本をハンケチで鼻を抑へながら見物してかへり、主人公の母に『今日は負うた子に教へられて学問を致しました』などといふ。さうかと思ふと、ブルジョアの友達の宅に園遊会があって招かれ、楽隊の演奏をきいたりする。ただその友達が女中などにひどく横柄だったのが厭だったとか。

お伽噺や少年少女の空想的な世界とはすっかりちがったかういふ子供の現実的世界の再現は自分には驚異であり、歓喜であった。それは詩と現実との美しい調和で、空想ではなしに、自分の日常生活にさういふものを見出す可能性を教へてくれた。」（同上書、二五九ページ）

ここには、市原少年と「童学暑中休暇日誌」との典型的な出会いが述べられ、かつ、「日誌」のほんとうの存在価値がなんであったかが的確に道破されている。

なお、東京高等師範学校附属小学校で六年間直接芦田恵之助先生に担任された山中鎮氏は、「童学暑中休暇日誌」について、つぎのように回想されている。

「先生にいただいた『偉人の少年時代』『学童暑中休暇日誌』は今も手もとにあって、時どき読みなおしている。先生のかかれたこの『日誌』は一人の小学生を中心にした家庭のつづりもので先生のお宅をたずねた記憶からたどると、先生のご家庭のいきうつしのようであった。このような本で自然と心のしつけ、家庭のありかたを教えられたように思う。」（同上書、三八六ページ）

山中鎮氏所蔵の「童学暑中休暇日誌」に接して、それを借覧された青山廣志氏は、「日誌」を解説し、かつ、その中から七月二十日（月）、七月二十七日（月）、七月二十八日（火）の本文を引用しておられる。（「法楽寺の芦田恵之助先生Ⅳ」、二六〇～二六五ページ）

青山廣志氏によれば、「童学暑中休暇日誌」について、芦田恵之助先生の語られたことを、つぎのように書きとめられている。

「（「童学暑中休暇日誌」は、）子供が、自分の生活に目を向けなければ教育は本当にできるものでないということを主張しようとしたものだ。わしには明治の末年から大正のはじめ頃にかけてでないと、そういう思想は熟しておらん。」（同上書、二五九～二六〇ページ）

「『学童暑中休暇日誌』のあとを襲ったものが『綴方十二ケ月』だった。綴方十二ケ月を書こうと思ってやり出したが、そいつはとうとう五か月でへこたれてしまった。『学童暑中休暇日誌』に出ているわたしの思想は、今ここへ出て来てみても、まず変わっておらん。樽井辺の子供が、この頃ちょいちょいわしのところへあそびに

来るが、つかまえて話してみるのに、自分の生活というものを知らなさすぎる。本を読むことと、生活するということがまるっきりかけ離れている。」（同上書、二六五ペ）

「日誌」の著者芦田恵之助みずから、「童学」暑中休暇日誌」にこめられた思想について、また、「日誌」を受けて「綴方十二ケ月」が生まれたことを、述べているのは、注目させられる。そうした意図のもとに成立した「日誌」が、当時の学童に愛読されたことは、前掲市原豊太・山中鎮両氏の述懐・回想によっても推察することができる。

一〇

さて、芥川竜之介の小学時代の「暑中休暇の日誌」（満一二歳、明治三七年〈一九〇四〉）には、たとえば、左のように記されている。

七月二十一日　曇後晴

下女に揺り起されて　折角楽しく遊んで居た夢の国を離れたのは丁度五時三十分でした　いやなセピア色をした雲が二ツ三ツ　御用五葉の松の木のかげから静かに吹き送る朝風にあほられて面白いよーに流れて行くのを眺めながら　朝飯をしたゝめました　食後一定の復習を完へ　二三の友人を訪れたり　地図の制作や　作文の原稿を作つたりして　十時迄費しました

十時半頃　弟と叔母とが来たので　折角楽しみにして居た読書も十二分に出来ませんでした　昼頃　弟が昼寐をしてゐる中に又々地図や図画をかきました　が　起きはしないかと気づかふ有様は　とんだ頼山陽先生でありました　今夜　叔母と弟〔は〕自分の家に泊る事になりました　寝床九時二十分　（「芥川竜之介未定稿集」、葛巻義敏編、昭和43年2月13日、岩波書店刊、四九八ペ）

七月二十七日　曇

今日から二つ役目を〔引〕受けました　曰く庭掃除　曰く掃除

掃除と云ふのは　自分の居間と食堂と寝室とを兼ねている四畳半の一間を片づけるのです　復習読書　例如

夕方　のりの強いゆかたを着て庭の松の下の影に涼みました　えも云はれぬ涼風に　思はず　夕月と此の秋風を吾一人こ・に占たり菩提樹の影の歌を思ひ出しました　松と菩提樹　夏と秋　ところ違へ　涼しさの甲乙はありますまい（同上書、五〇一ペ）

八月十七日　晴

一寸云てをきますが　日記が七月の三十一日以来短くなつたのはあまり前に長たらしく書たので紙数に欠乏をつげそうなのです

今朝自分の幼稚園時代の折物や何かをとりだして見ましたが　自分がこんなものを書いたり拵へたりしたかと思と何となく床しいよーな感が起て……その中に目の前へ幼稚園時代の人々の姿が夢のよーにあらはれて「御久し　ぶり」　抔と昔の通なあどけない声で話かける　あゝ昔にかへつたかと顔をあげると矢張自分の部屋　なんにもいない　昼時の号砲にこのくだらない夢想をやぶられました

水泳読書共平日の通り　寝床八時十五分（同上書、五〇六ペ）

八月二十六日　半晴半曇

行く筈で無かつた海岸行が急に一日の清興をむさぼる事にして大森行と定りました　処が此日は暑いどころか寒い（誇大ですが）ので単衣の二三枚も重着をしてガタ〳〵ふるへていました　帰途アイ

ルランド御伽噺の二人半助を求〔め〕てこれを見ながら夢の国に赴たのは午後八時四十分（同上書、五〇八～五〇九ページ）

八月三十一日　（天候の記入なし。）

朝の中は粘土細工の賽を作りました　復習読書例如

昼すぎ梅田君から借りていた本を返し　それから坂口君を訪れました　そこへ村越君が来たので　少し寒いか　しれないが行ってみよーと水練場へ行〔く〕と今日は休業と大きくかいてありました

それから清水君の家で遊んで三人うちつれて家にかへりました

但　坂口村越の両君は家へよつて遊んでゆきました　夕方出校準備をしました　暑中休暇の日記は以上で完ります

私はこの暑中休暇に於て地図や図画や作文に此迄の休暇にうけない苦〔しみ〕をしましたが　又天造の宝庫　見渡す限り水天一髪の大海や緑の毛氈をしきつめしが如き草原や或は瀑布となり或は渓水となる水についてや　種々雑多の事柄を記憶ました　これも休暇の賜物と云はなければなりますまい　休暇　その文字を以ても平日の労を癒すのに違ないですが　その中にあつて遊びつゝ目にふれ耳にきく事物について観察したならば　いと趣味ある事でありませう　（同上書、五一〇ページ）

芥川竜之介の「暑中休暇日誌」は、芦田恵之助著「童学暑中休暇日誌」の刊行に先立つこと四年も前に記述された。すでに才筆の芽ばえが随処にうかがわれる。さすがに芥川の「日誌」に記されている生活のほうが自在でのびやかである。しかも、両者の学童としての生活ぶりには、あい重なる面も少なくない。

逆にいえば、芦田恵之助の「童学暑中休暇日誌」には、それだけ当時の学童の生活が如実にとらえられている。さらに、規範的に描かれてもいる。

一一

「童学暑中休暇日誌」の刊行された明治四一年（一九〇八）といえば、当時の一中学生（旧制大分中学）の暑中休暇日誌（七月二〇日〈月〉～八月三一日〈月〉）が残されている。それによると、たとえば、つぎのように記している。

七月二十一日（火）　晴天

昨夜寝ねてより今朝七時に至るまで夢も見ず安眠す、朝食をすまし、弁当腰に出でかけぬ、余は案内者なり、先づ藤原村赤松山願成就寺に詣づ、道程二里弱、蓋し有名なる寺にして遠近よりの参拝者多ければなり。寺を出で同所の学校に至る、単級小学校にして教師一人、（余の知人なり、農繁季に繰替休業をなしたるため尚ほ授業しつゝありき）なり、来意を告げて暫し話したるも授業に差し支ふるため再び出でゝ赤松橋てふ堅固を以て有名なる石橋を見、一茶店に寄りて憩ひ弁当を平ぐ、休むこと一時間余にして暑さを嫌はず帰途につく、此度は日出町に廻る考なりし故、少しの遠きをも厭はず横津神社に詣づ、社は城山の中腹にあり眺め佳なり、町の模様も一望の内にあり、豊後湾の陸地深く進入せる左方よりは四国をも見るを得べし、祭神は日出藩第三代の主にて参詣人亦多し。

降りて日出町に至り松屋寺に詣づ、庭前の蘇鉄の大なること又名高し、西方一丁余にして碩学帆足万里先生の墓標あり、至りてその徳を追想す。

旧城跡に至る、目今尋常小学校となり居れり、古松鬱々たる海岸に降る名産城下蝶は此近傍より出づるなり、かく所々をあるくうち日は西に没したれば急ぎ帰れり、（明治四十一年「銷夏日誌」　恭組工藤節治　による。）

八月二十六日（水曜日）　曇天　時雨あり、

先般の洪水にて東山香村の親族、家財悉皆家と共に流失せる事とて、兄はその時早速見舞ひたるも、その後便りもなければ、行きて便を得んとし発足す（三里位）　就ては何かな持ちて行かんと種々取り集め背負ひて行く、道路甚だ悪しく雨さへ降りければ非常に困難せるも遂に午後二時頃着せり。

河に沿へる道路陥落して跡さへ分らずなりし処三ケ所あり。当時ははや仮りに作りて馬車さえ困難（ママ）ながらも通行し居たり、赤松を過ぐ、休業の初吾々の（松井君等と三人）休みたる茶店の如き流失してなし、赤松橋は依然たり、堅牢なる事益々明なり、聞く処によれば高さ三丈余の橋なるもその上を水越へ（ママ）たりと、如何に出水多かりしかは想像せらるべし。

小さき仮りの家に止まること二時間余（昨日まで他人の家に世話となり居たるも本日此処に来れるなりと）挨拶の仕方さへ何とすべきか分らず只共に悲しむのみ。近隣のものは三人も溺死し死体の行衛さへ発見せざるに比すれば不幸中の幸なりとあきらむるの外なし、など云ひて袂を分ち帰れり。日既に暮れて帰れば便り如何と待ち居たり、足も洗はず一通りを語りて共に安堵せり。

本日は一部分に過ぎざるも水害地の実況を視る事を得たれば先日来の希望を遂げたるが如く感じぬ。（同上日誌）

同じく明治四一年（一九〇八）、深瀬基寛氏も、「暑中休暇日記」をつけている。高知市の旧制中学一年のときの日記である。

七月二十三日　木曜日　晴

朝早く起きて画を書いていたら友だちがきて我母（ママ）校の尋常小学校へ行かぬかと誘ってくれたからさっそく一しょにいった。僕がこの学校を卒業する時記念に植えた桜の木が勢よく栄えている。

しばらくして生徒の体操を見た。それを見ると吾々の幼き時の事が思いだされて何となくなつかしき感がする。授業が終って恩師に面会し色々のお話をうけたまわりやがて家にかへった。

夕方高知市の友だちがきた。かねて頼んであった僕の試験の成績をしらせてくれた。友だちは二三日滞在すべく約束した。（「童心集」、深瀬基寛著、昭和33年8月15日、中外書房刊、二四六～二四七ペ）

八月七日　金曜日　大雨

夢ようやく醒めてこころづけば雨のはげしく地をたたく音がきこえる。また雨かとがっかりして起きて見ると昨日にまさる大雨である。

こういう有様だから仁淀川も水が増しているだろうと思って降りやみの間にいって見ると、はたして河原いっぱいの水である橋はもう水にひたされて黄な水は滔々と流れている。

と見ているうちに墨をながしたような黒雲は、はや頭上に来り、ぽつぽつ雨がふりだした。大急で家にかへる。（同上書、二五五～二五六ペ）

八月十一日　火曜日　大雨、晴、雨、曇

「水が出やした。ほんとです。おうちの桑畑も水そこになりやした」と行きちがう人の話、これを聞いた僕はただちに堤防にかけつけた。水は早、堤防の中程まできている。

うづまく濁流は岩にあたって益々激し、ものすごさえもいわれず。無邪気なる小供等はいなごなどとって余念なく遊んでいる。うちに一人の子供は足ふみすべらして水中にまっさかさま。うきつ、沈みつ流れてゆく。折しも着物をつけたまま水中にとびこんだものがある。やがて子供をひきあげた。よくよく見ると我父であった。子供は、ものもいわず泣きもせでただぶるぶるふるえている。（同上書、二五七ペ）

八月一九日　水曜日　晴

白い朝顔が始めて咲いた。それを取って本へ、はさむでおもしををく。（同上書、二五九ペ）

八月二四日　月曜日　雨

学科の復習をなし本箱、机上などを整頓する。（同上書、二六一ペ）

八月二六日　水曜日　雨、曇

おぢさんの所へ行く、午前八時うちを出た、馬車に乗ってやっと高知につく。今日はなんだか馬車が遅い。

おぢさんのうちで三四時間ばかり遊んで帰る。帰りつくと、日は早や西の山に入った。（同上書、二六一ペ）

八月二九日　土曜日　晴

例によって復習。

午後水泳に行く。（同上書、二六二ペ）

深瀬基寛氏の「日記」は、七月二一日（火）から九月六日（日）まで記してある。工藤・深瀬それぞれ毛筆で、日記をしたためている。

非公開をたてまえとしつつも、提出して先生の閲読を受ける日記であるが、両氏の「日誌」（「日記」）は、いずれも丹念にリアルにつけられている。しかし、芦田恵之助の「日誌」のように、暑中休暇の始終を通じて、ゆるみなく、完璧に整えられているわけではない。

小学校六年、中学校一年、それぞれの暑中休暇日誌として、その日誌様式に類似した点のあるのもおもしろい。

一二

以上、芦田恵之助著「童学暑中休暇日誌」の成立・構成・内容・価値についてみてきた。さらには、当時の小学生たちがこの「日誌」をどのように愛読し受容していたか、また、当時の小学生・中学生がみずからの暑中休暇日誌をどのようにしるしていたかをもみてきた。

芦田恵之助がアミーチスの「クオレ」（「愛の学校」）の邦訳に触発されながら、「童学暑中休暇日誌」の述作を思い立ったことは事実であって、みずから述べているとおりであるが、その述作の成果は、「クオレ」の単なる翻案や紹介ではなく、日本の学童の暑中休暇の生活がくわしくいきいきととらえられ、児童読物として独自の価値を持つものとなっている。

「童学暑中休暇日誌」は、芦田恵之助の述作活動の系列としては、「丙申水害実況」（明治30）→「試験やすみ」（明治35）→「童学

暑中休暇日誌」（明治41）→「綴方十二ケ月」（大正6～8）の順に位置づけることができよう。対象をリアルに描く修練の基礎は、「丙申水害実況」によって固められ、学童の休暇中の生活を描く呼吸は、「試験やすみ」によって会得することができた。「学童暑中休暇日誌」は、それらの基礎の上に結実したものであり、「試験やすみ」の発展・拡充せしめられたものといえる。

ただ、「試験やすみ」においては、夏野繁雄（四年）・大山正雄（三年）・山川清（三年）という男児たちのほか、春山はな（四年）という女児も登場してくるのに、「学童暑中休暇日誌」においては、女児は一名も登場してこない。「綴方十二ケ月」にも、野中花子・繁子の二人の女児が登場して活躍する。ひとり「学童暑中休暇日誌」においては、女児のことが忘れられているかのごとくである。著者として、意識して描きわけたのであろうか。周到に構成されている「日誌」に、そのことだけは欠落しているという印象を受ける。しかし、当時の小学校学童の私的日記としては、学校生活における男児・女児の活躍を描くのとはちがって、おのずから男児（野山・杉山両君をはじめ）との交際にしぼらざるをえなかったものか。女児を登場させることによって、主人公春山真の生活は多彩になることはたしかであるが、かえって「日誌」にまとめていくことはむずかしくなると判断されてのことであったか。

「学童暑中休暇日誌」は、児童読物として周密に組み立てられ、完結している。その完結性・充実性には、「試験やすみ」・「綴方十二ケ月」には見いだせないものがある。当時の都会における学童の暑中休暇生活がこれほど克明にとらえられているのは、めずらしく、わが国の児童読物史上にも、独特の位置を占めるものとみてよい。

「学童暑中休暇日誌」の成立が、芦田恵之助の力に負うものであることは明らかであるが、すでに明治後期、当時の小・中学生の表現力（たとえば、日記をつける力）・理解力も、相当に伸びて、「日誌」の成立・受容を可能ならしめていたことも見のがせない。その点では、「学童暑中休暇日誌」は、生まれるべくして生まれたともいえよう。

（昭和48年7月18日稿）

付記　「学童暑中休暇日誌」のコピイに関しては、国立国会図書館当局のご好意によるところが大きい。記して、深く感謝申しあげる。

（本学教授）